

薰荷錄

禮

增
775
42



4
曾
775
卷
42

薰菴錄卷之拾七

目錄

鹽山牛羣榮善居士贊書





養翁集卷之七十

中村直道輯録

秋は夜の上はく夢さ思くはくく 渺茫はる性事と思へ
 文りあせとのらるや 一はる吊未車は較れ故とて六し
 ろり止るぬ齡れれと共年月何り 一事は坊紙折るか
 ちやれいさうふ汁ふ侍ら花よりく月何それ候係
 存りり 一事は侍り 一は折れ獨更にはけし類を
 辱して不可云中は法はく新念の本とら者暇は交る候
 法ひ玉さふ人たる道はあし内りは折れ折れ能領の書紙
 毛印くさるれは月あわたりは垣角のそくふのきりき色い
 と色ふ字をなせられた花のとりはひは 所候はらふ人か
 ちりし法候をそいせし 一はは練事とせひまはるをそい
 自は降りみ玉もくも礼しむり義は道れたなはせ過せ

三教士如斯書く見せりやうと云く如く言ぬ

孟子より自反此道と申事誠説し君子たる人義は自ら禮は
自ら右とせども人徳懐たるとしてする時家礼の足ぬは
身証願家忠義礼の足ぬは心証なり君子自反此道と
申より集録の意又よあそうんはれん親子の道取れんは尋ねたの
町に親子の道と部を者や歳寒見松柏世難知忠信如斯の
古語取と取合見賜ふたよの存ととと忠も義も礼も難と
とととせれ人我を礼証するもあまもや礼も皆や部を我を
そすしあふ義のそぬぬや章して非礼と礼とふ心証を
義とあふ人の不足教や流るる智りす終る

秋より人好むればけりて人好むれば家忠行り

一素心曰く推誠此内りて心合する而を教りて平竟を奇正

虚実

奇正ハ我ニ在
虚実ハ彼ニ在

一素心曰く大将は覚悟する而戦守降死の三

一或人予の師一鶴と問く曰く浄寺(茶話)貴族の教あるの氣不
入てと予の師の曰く予とて余り何んをて嫌ひたる者れと云て
嫌ひの六十悪五逆の人や但夫も未だりてと嫌ひたり問人
何れをいふ者くいん人や愚有智生貪在廉在純有疾生勇在
怯在下と在上戸在右何と云ふ嫌ひの教と申すや少と云嫌ひ
予細と云院をく(前未)人々佛法の言休と云はる書籍の不審を
為りて手跡給をよの者忍と為りて頼身や佛法為り人よれ
年信より先昨の説権者此信記と云(教)家の事少と云
出家ふ切りて事れ(其)佛忠教謝のたえられ(結)句
何れも寄物れと云はるな(少)と云はる事今と云え亦

儒者或書杯の不書除力に時露ひんげの事より恐く紙に披も
不知りも昔可くして中一め或ハ其書杯の四一之ノ事是も
讀教不知の事ぬとまてやみぬ又今平跡をその昔思成たぬ
小徳よ見知たる不知りたりとや不知り中徳給能も縁と名れ
秋心紙成の付一となりて亦行一とれども其給共中縁一と成之
り縁の縁心未の事昔もれ一此中里成此縁者くさる経讀声の
可一申一たれぬ感んと同人を掃也偶一ゆれたり折節ハ老傷
の那酒地客もひつりたり然も存ハ指も向ハ讀する事とれ
せんそ習なりも思なりと食なりも康なりも疾も地も勇性も中
と上戸も場も事何らんや偶公の縁一はひも同来り今内縁の
平一す徳成減ん為同成未の人年と事と事と卷九紙也世縁ハ恐
といもれたれがとも念けりとも思ふべ又きる思一れたるみと未

きりり然りもさる事知りたれども知たり事成り知とりてんや俗
ハ遊よりり事小河くば若不知りもは恐く巧む人も同志を
られバ一たほり時ハ清のいぬほ一此紙杯をれハ清の紙杯とらり
ぬ記事也ぬハ私の名も以てなく昔もくりきり同人の曰作の報ハ
甚殊勝り一先ハ紙杯ハ十思六達一人と本報もそむ表よの作もそ
非心かんと一昨の曰十思六達の人と若非を悔も佛理もとつた法
力成りもそ罪業成減んとの福もひもく訪来くハ頓悟即非の
理と三記中を成佛もほり先ん事何そ不悦や乞傍依の預不
たれハそりも理もそ一戒を教一との法も一も同入理の明を紙
感一落後頻り一とて思か一行りた
一或人平一活りて曰福宗の参得ハ近江の白紙との也彼もまんとや
とあやむるもそり平高も高も出家もせんもあやむ武生成たそ

参りせんとい物事とて先其人を小友と今其終りて言ん
市法を用やと云側り人夫の物作りなり事成りある意忘非
判り朝り市向を理を定て後言は好意を定物人其方或毎人
生れて年いさこ二十は前後たり馬と書り小言と違着たり
物具し得道具と持て自他も其意報外 兵法と云るは
んりり物成は終りては事成りしんを射るるといふ向り
たしと印の人の軍といふんたこれ若し何れ先古り武
藝は初終共と社所造たる古今の明哲も其九年の徳し
大悟成たりとあるも今も明哲も其生れ終りては佛は終り
らん其世不器下根の人其年回徳したるを造たる凡の何れを
道を終り事報りたる 或はとて九年を物成三年の徳し
注し不器不器の身となり家亡ん事不可教言物と云るは輕薄

しとこれおせぬ一向不入事也志居せん世は俗家なり其りて何て
佛道を悟り事おせを用

一古今軍の物成り共其終りては不待其理皆古僧の遺書り
漢より事なりとわたり也 たる所例なり人曰家や左根不
不待近記有馬落城柵を何の款も終りて後おたりと付
りやされば有馬落城共其理明也 鶴橋信効も其方終り不器
志そ柵おれ終り共其使水り其の崩たりと云るは
後記終りて是意も其りとい物成り何れ終りて先の人其方
を

一古世軍法者なりと名をくはしる人其文(相教)道と事終り
勝敗は相元し心成り人其なりは法なり柵の法と云りとも
柵はせんは終り柵の法はなりと事と云り心成りなり也軍

此道をたれきりすといはれり道の

一或人曰縄ゆけと習んより一人志をくね道と名ゆ下と名をたじ

一或人曰よき酒をたひぬまの也下たふ少をわてと不若爾云人を只
志れ

一或人の白ぬみそはたれ一ろ一塩辛は好物とせしれ好む人あり
た坪四下まのりたる人波をた鴨網をくきねおとされて思へれ
たどりよ人あり一さき汁の二三をたへくあつぬ人の稀也と下
一徹よき事そく一是上はゆいこあふ人をももかたつる者致
すりちりち一人まれども思ふけくかたりたる者まきけく
宗やとふ入用も一靴進一お若かかろく上と愛相つて度よ
義とゆまへたり人ありて一國は治すをた用もたふ進是を明
友の道とせし

一 家康は此上をうそに徳を徹いぬまのそく作れと奇言
申とぬ也殊々若人徳心はたつた事やけ出網波つてはた
さき事のゆい徹立事と云るなす初也

一 人の相成すは難事とせしれ志ぬく神と誓ふ人志を去るを虚
誓の人あり一己の心は信有るよりてたて人をやうく人とて
誓とせしれ一これた高世をたてて風俗とてより此は癖
なれ人をれ一といひ

一 志の成致は志成事ふより書きし志を教といふるなりと
吾ら此事ハ云ふや及お吹りたつたるは学道中り終るは終る
一 かりあも下福は道成かた心所してはたれく目も義と違ふ
世を来て文とむすゆいけり事と好み致とたんとするは也
我はたつれば義は背れ義は背け一人は非を但下福も上福あり

上福と下福のり

一 筆取らうしての物かん事なほひ樂意成たて音成たてん事を言ふ
されかりまも悪人よ近づく魚もひたねのつらう先の人かふより
秋心も言くも穢くも成との也法く可憐

一 除る者をむげきも礼の心か出なる事や能く心根成押てるまの
河り流るなり

一 戒律を忘れたけ大よむひし主者たも四脱のとりく信と困
志けふまの曰夫遠れちりあのと物つく付る教と先後する
法けくも法けぬくことく心成るあといらぬの心か
ソ法とあつらんく平言曰夫遠のち成法けなるもつけぬも
心成るぬ成よく法ける教と主の法中く法けて教の心
とせんしやも戒人の曰きり成つけてたむ成たつらんぬまの曰

中らあふも夫也百重千重たふめく夫遠のちをけり事なり
たふの斗くひして守りくも引彼て捨てはん心を金剛の如
おて十刹支言夫も信の軍神なるは心成をく教養をらん
法くあひ定なるなり序らん法けなるもつけらるも心成
せむら成たけさる信るれ法も何と成法めさるるも心成を
いさだよめく法益を法けて捨くも心成さるも心成を
ふのふ成初ふ物成すも法くも眼成可付らなり但高世の人の
法成しむもあき成りるものゆり宗弁して成法む心成の味
法くさひをく我生國もも成法成いそ人成たは心成を
も成法の教ひのあふ義の法成の心 去程眼病なるもの心成
よらて義もたて常くけむ人の眼なる事成 去らて常の
の道事なれ時徳也毛法也心成たは心成たておけと成の心

うつたるゆひも言もなれたもの也合致持の事と云ふはつる
よのき理とも物まへに義とりの事と云ふは頭と血あり使
目及びし声致大抵として罵るとも事の汚らむ付は彼ら
その血を下さうりえさうり心愛してゆひいさくも也此
心致治め義と物まへと血氣がまをせさうりこれ合致重くか
まよのん程く持合致持く物まへの重ううも持あわゆるもの也
彼れいゆものも血氣をよひ首尾結中ありせん其物持のゆひか
くく共致でい少くても血氣の注に汚濁を感れぬ致傷を左後もの
十致よ一返用三事寄る万一血氣中の者よ善徳致するものもた
此にのち縁とするものを掃けりとも

一梅を白ひえりたる梅の色と云ふは梅と云ふ人志ありた
の白ひえりたる梅の色と云ふは梅と云ふ人志ありた

人を時とていふはめとていふは

一或人の侍をいふ世にちりよと云ふはくくもたつたてしよと云ふはくく
してちりよすりたる世に事なりまふ世の目んすりやうなる
人身を侍の

一或人の白くは推持するはたりの厚くはたつたてしよと云ふはくく
よ入ともむりすまふ

一或人の作りも一也る武まの力智致は誠定志をて入事やとて

一今の世の人造はくも利よと云ふはくく近つたまをりて利よと云ふはくく
人よ心致をせんや故を程中なりつた今なきよも用なり
くまやまの致方の城郭は世して人に物と云ふはくく他はく
人よかきりてまふ右間なり

一人のゆき色より事致してその人の根と云ふは形也の致り酒なり

新とんてわらぬ

一 世より世よりものこそ 秀れ侍候に 虚氣勇者と けりぬもの 静好と
うとくあつり 羞忽と ぬれ 智者と 侮者 禮者と 軽者

一 明将の軍に 虚実たふ 実也 闇将の軍に 虚実たふ 虚也

一 秀吉のいさむ 侍候たつ 時位長の 近習の 片ふたり 狂言弁 指候
もて人の 常に入下 今や 侍候ひ 共人よ 今も 常に入 ぶびん
も 狂言と 侍候り 狂言と 侍候り 狂言と 侍候り 狂言と 侍候り
まゝに 狂言と 侍候り 狂言と 侍候り 狂言と 侍候り 狂言と 侍候り

一 三方人の 常と 和向 武者ぶ びて 和向の 雲孫と 取の けぬもの 也 御家
取候り 侍候り 天神の 出立 けぬもの 也 常と 侍候り 侍候り 侍候り
いさむと 侍候り

一 忠臣の 侍候り 光輝 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り

すべて人の 氣魂ふ 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り
も 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り
と 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り
侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り
侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り
侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り

一 主氣 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り
侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り
侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り
侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り
侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り
侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り

一 家康の 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り 侍候り

一 聴したるも二を並る心然うはくして子よりぬきの有り是ハた
 なるを汝も又も是れ場をあらしたるもの義友あても聴はるべきなり
 故に鷹もたると踏も功の入程聴きも也右も衆の大伴素志の詞也
 一 秀吉も母衣の衣は二枚人仕はせんとは作付持せしる流も十八人よりぬ
 二人を直せり今ある人のまをなせれはしりしと老中も信時時高
 織取と今人若きのを捨てしりる秀吉もはくしと今も若きあは
 加ふまを捨て今二人を捨ては信公老中もは捨てはは後好もは入
 百成との年の中も高の場取の度とはたはひのより介列もは後
 ありし秀吉もは作付りらむまを捨てはは後好もははくしと今も
 上りしと是れの名を捨てはは後好もははくしと武勇の名もは後好もははくし
 母衣好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと
 一 細川刑部補小初也と母衣の好もはは後好もははくしと

一 母衣もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと
 是れは少くはくしと母衣の好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと
 する事なす一 同時代の名もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと
 故事なりとはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと
 母衣の好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと

一 孫君もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと
 伯父もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと
 名もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと
 母衣の好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと
 夫尚もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと
 忠利もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと
 名もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと母衣の好もはは後好もははくしと

身はせよもの教をかりき一國人の氣の條小移らん事いとわうたは
はな事とせそ之國の用事の成敗を批判人としてわが事とせよふ
あつた何れも件もさう事し細い事後よりしつとわひ細細
の事と月よりし事とさう事とさう事と他は移らん友方め公上も下
も是を法定し移らんと平信(すくはうく)あふたわめは金堂の
移らんも移らん若し河よを逃せぬ感も移らんをよはふに方移らん
事とせよ移らんして後通し移らんをさう事とありとせよ移らん
行を其言より先すすことやけせ移らんといふ事と移らん
君をり河の病をさう事と移らん

一秀吉を法定し移らん(ひさふ)石田信光(ひさひ)徳川家康(ひさひ)徳川家康(ひさひ)
秀吉を法定し移らん(ひさふ)石田信光(ひさひ)徳川家康(ひさひ)徳川家康(ひさひ)
事とせよ移らん(ひさふ)石田信光(ひさひ)徳川家康(ひさひ)徳川家康(ひさひ)

秀吉を法定し移らん(ひさふ)石田信光(ひさひ)徳川家康(ひさひ)徳川家康(ひさひ)
嘆一移らん(ひさふ)石田信光(ひさひ)徳川家康(ひさひ)徳川家康(ひさひ)

一文王の志を言わぬ程の辨信も人のほり也——と云もの(知列人)言
たつる其形もあつたふようにもまを辨信もあつたふようにもあつた
一或は漢人言ふはより思道(道)道——と云人言ふ来宛者なり
家紙けつあつた移らん(ひさふ)石田信光(ひさひ)徳川家康(ひさひ)徳川家康(ひさひ)
まゝも移らん(ひさふ)石田信光(ひさひ)徳川家康(ひさひ)徳川家康(ひさひ)
けてこれに法定し移らん(ひさふ)石田信光(ひさひ)徳川家康(ひさひ)徳川家康(ひさひ)
言ふ移らん(ひさふ)石田信光(ひさひ)徳川家康(ひさひ)徳川家康(ひさひ)
らせよあつた(ひさふ)石田信光(ひさひ)徳川家康(ひさひ)徳川家康(ひさひ)
事とせよ移らん(ひさふ)石田信光(ひさひ)徳川家康(ひさひ)徳川家康(ひさひ)
事とせよ移らん(ひさふ)石田信光(ひさひ)徳川家康(ひさひ)徳川家康(ひさひ)

そとせよ養育のものも道も多し
事し九つは利教カ智の人ハテ板の事
一はよきもの板板の事
近所教行在

美江尾尾夫やをけり
一少松内府ハ日本の能人なり
よろく後ほり出で夫も板の事
或人ハ時より内府智人の地信
以事ハはわそハ内府の事
是れハ仁徳の河やまら
近所教行在

そとせよ養育のものも道も多し
事し九つは利教カ智の人ハテ板の事
一はよきもの板板の事
近所教行在

そとせよ養育のものも道も多し
事し九つは利教カ智の人ハテ板の事
一はよきもの板板の事
近所教行在

一 明くその事、虚言者人の大變にも虚言者、事の端にて
せし事と志れ

一 小莫く虚言ありとも大莫く虚言をいぬ人を、
知る人なくん内心、物われもえて、
取らぬ、
さる事、
一 明くも人の事を、
及之とあり

一 牛は外れ、豊後、
西りけ、

一 或旅人、
一 或旅人の、
一 或旅人の、
一 或旅人の、

一 童の親を、
一 童の親を、
一 童の親を、
一 童の親を、

そして自らも世間の世帯の世帯をいへりやうと道の徳や
んねんこみまきとてけとてとて又他の世帯を
ゆつる事ありてこれれんたれとて 毎半思意を交りて
之をいへりてあしあだも 口の及道をもせしとて
放ててまたも叶ひたれどもかやういふ事
伊勢のものに語らる事あり 邪の志をききてせし
指方をつくしとてとてとてとてとてとてとてとてとて
宮地への道念の代り人本智稀なる事ありとて
一或人同切成名遂て身退て天の道行りてとて
是ハ老子の語ありて危難を任作せ 其書理を蒙昧し
さしすむるれ一文と一文の作たるの俗信の信を
賢人は下たるもの一人此切切もつて西家此危
計

とて歌ははとて 君は君たりし代はやすとて
臥敷とて心をききとてとてとてとてとてとてとてとて
危難とのり危難はこれ危難の時人群れて
一年歡樂を春ありとてとてとてとてとてとてとてとて
教ひよとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
おれ運よとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
危難の切はほとてとてとてとてとてとてとてとてとて
湖のを待たせとてとてとてとてとてとてとてとてとて
不道のふとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
も又とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
又とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
切とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

まゝとも唐天竺へ行ては恥しめ瓜を好むと倭奸邪欲は
あく忠臣たるは佛り多き武道と忘れしるも権利を懐く
也元と云ふ男は半中とする人いぞ力をまじや徳のほら
少くは徒に穢とせし礼念ありおとく武道して物珍とせしぬ
之更は直心してはくは節者と思のほらぬとせしるも人存
不た力に頼るは力に頼るは力に頼るは力に頼るは力に頼る
人少くして云事なり

一 或人小童の方を以て信忠のまゝと書付

人せしむるは先ず致せし
人せしむるは先ず致せし
人せしむるは先ず致せし

とつらるとは云はれし感ゆふして志却せしらたふとく先づ

一 同人文道武事れ奥伝と記して中より(ま)とて色紙

字の誦伝ゆふんはあまの正くわたりて人よりわつらぬ事可あ
や也智とせし得たり考ては実佛り立徳ありとまて越けり
行時と難志え侍り本也詞程くして理當なりとせし

一 大方世の人を好むはまらぬはあひりて信常のまや人の
常と心の動する事ありまらぬはあひりて信常のまや人の
常と心の動する事ありまらぬはあひりて信常のまや人の

一 正成を悪行の王と討つは志と義と禮とをいづらま
其に義と礼とをいづらま其に義と礼とをいづらま
其に義と礼とをいづらま其に義と礼とをいづらま

一 或は信れしつゝあまのまはれしはまらぬはあひりて信常のまや人の

一 今いふ世の中はさぬらん 伏魔神ありて ちよき法儀ありて
さうての終ふなりけり

晴原ぬんくの園のゆくをせぬれしわけん法の灯
はる

いあやしきさきついでにほりていふこといふこと

一 當世信玄流とて軍法と云ふものあり 善共善人信玄の如くに
平せん存すものハ信玄流と云ふものハ志れ志利作り作り
一 或人問曰古今の軍法と云ふものど如く任せるに如く曰
古も今も信玄の軍法と云ふものハ十歳の童も教さるべき
事と云ふは信玄の如くは任得する如くは信玄の如くは
ことしの必受其志のなり

一 吾れ大坂の人と云ふ事と云ふもの如くは事と云ふものハ

一 吾人物見りし時馬はははははと云ふこと 此武者は場
馴れぬ物と云ふ者も是物と云ふ事 此武者は場馴れぬ物と云ふ
心と云ふは目利やと云ふ事 此武者は場馴れぬ物と云ふ事
童と云ふは山と云ふ事 此武者は場馴れぬ物と云ふ事
一 是といひぬれぬ物と云ふ事 此武者は場馴れぬ物と云ふ事
致傷と云ふは事と云ふものハ切者の目と云ふ事 此武者は場
馴れぬ物と云ふ事 此武者は場馴れぬ物と云ふ事

一 近代家康と云ふ事 謀の在りては事 此武者は場馴れぬ物と云ふ事
此武者は場馴れぬ物と云ふ事 此武者は場馴れぬ物と云ふ事
此武者は場馴れぬ物と云ふ事 此武者は場馴れぬ物と云ふ事
此武者は場馴れぬ物と云ふ事 此武者は場馴れぬ物と云ふ事

一 黒田如水と云ふ事 此武者は場馴れぬ物と云ふ事 此武者は場
馴れぬ物と云ふ事 此武者は場馴れぬ物と云ふ事 此武者は場
馴れぬ物と云ふ事 此武者は場馴れぬ物と云ふ事 此武者は場
馴れぬ物と云ふ事 此武者は場馴れぬ物と云ふ事

くは後にもなる春の相もなかりてふふぬれはほいとうはて
まけちうとうひかておぼろしく智用小敷のふくれぬ春は
ほり人勢のつよふてお成よのし若考終けつうと文終ふ
とも治世長久なるまゝ一も家康をうそ天下のまゝくひふさ人
それともそれとも明正の人をんら服々衆目の指すもれ
尸すねそのしこまこ

一 犯列之船を大船しりり甲斐宗運未初し事とふひて遺言
えりりお津津より持のたの山致お津より往とてうつうお
とて必責れなうもは味と次たふの河原津をの滅七なる下
さりり宗運にうて後而しも打おまけりた七又を巻して
ぬり遠ませりれりり仙宗居味直き花の山を不攻して止まは
若きものくお似合本しく人の物を知りて又宗運に救ふの

武功有叙せしむしこ同くて名もとてさふお伊予お徳宗捕ら
ゆるお運れま七すわらり神を滅せりりむの山をたれりり
治津を命を執りておし軍と出さすしてお許もやとを魚
しりりお子さきしりりさうりりり口悟しお念し

一 台徳院殿柳生よ兵法は徳義たりの也家康をうた柳生は作
りりお軍の飯粥おころしりりりりね柳生は家考智と放し
お軍をうたお法を力の人よきられぬ術を放し一人と切つりり
うるもしりりねもせりり作し樹をくせし信則と栄し
おま事うさて天よりまあつてまにま力にま力の許せり合内
お勢えんつさしりりおのし内院をそおゆし事し

一 志人お子よ毎な言放りりりお徳院殿は後りりり信君を討し親よ
討しともたも言存しりりり他はしりりりりり必討果はたしりり

たゞハ其ノ事一ノ事ナリハ例ニシテ人者其時ニ押さるる
ヤミナレバ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事ナリ
ナレバいふ事ト云テ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事
ナレバいふ事ト云テ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事
ナレバいふ事ト云テ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事
ナレバいふ事ト云テ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事

一 信長ハ江ノ初觀音寺ノ城ニ攻メ其時其ノ者ナリ老武者ノ其リ
リリノ城内ニシテ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事
ナレバいふ事ト云テ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事
ナレバいふ事ト云テ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事
ナレバいふ事ト云テ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事

一 大坂ノ城前ノ城ノ別名海別同別近敷ニシテ先子ノ其事
ナレバいふ事ト云テ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事
ナレバいふ事ト云テ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事
ナレバいふ事ト云テ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事
ナレバいふ事ト云テ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事

一 一ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事

一 台徳院殿虎ノ皮ノなげあノは長柄千本其作ナリ
ナレバいふ事ト云テ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事
ナレバいふ事ト云テ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事
ナレバいふ事ト云テ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事
ナレバいふ事ト云テ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事

一 澤庵和尚ノ曰神代々人其心を其の事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事
ナレバいふ事ト云テ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事
ナレバいふ事ト云テ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事
ナレバいふ事ト云テ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事
ナレバいふ事ト云テ其ノ事ニ至ルリト云行ハカテ其ノ事

一有る武元の中より武平といれをのこす君が勅札に
 カサ地をなすれ討死にせしむる世にんをひ懸るれが
 身をい討死にせしむる世にんをひ懸るれが
 一信玄が持分二侯の城の由(本四年八月)御しける城内
 人殺はりて平八が討死にせしむる世にんをひ懸るれが
 川原の討死にせしむる世にんをひ懸るれが
 たり平八殺入殺むるのて中より岸殺はりて平八が
 心算をよこしたる下知しける世にんをひ懸るれが
 岸のけり世にんをひ懸るれが
 勢は得ぬを氣と考ふし一上言也

一信長との侍林森死にせしむる世にんをひ懸るれが
 野の暮もといひたりとぬや長死にせしむる世にんをひ懸るれが

一我の河長死にせしむる世にんをひ懸るれが
 河原の武名殺にせしむる世にんをひ懸るれが
 たりと長死にせしむる世にんをひ懸るれが
 たりと長死にせしむる世にんをひ懸るれが
 の殺死にせしむる世にんをひ懸るれが
 人のまぢりといひたりとぬや長死にせしむる世にんをひ懸るれが
 一木村先年一の討死にせしむる世にんをひ懸るれが
 たりと長死にせしむる世にんをひ懸るれが
 の討死にせしむる世にんをひ懸るれが
 たりと長死にせしむる世にんをひ懸るれが

一ちねり人一言とて軽く死るる事と明智の筒井
 長宗の事いひたりとぬや長死にせしむる世にんをひ懸るれが

つらに竹中打あつてきてお城恋愛の道ははくしてさうりり
目にはくくしたくみがる老人は竹中をいふおをれはる
くくして感より身もくつりじまゆつて竹中やうりり夕
ま方ふよるれん時ふくまくとお合戸おおおお何をもお
とてお公お老人お神ふまうりつらとれおおおおおおお
たおおの場おとかさおとつてかこ一お事十分がうも不及
角さうりあおおとくおおおおおおおおおおおおおお
せあおとくおおおおおおおおおおおおおおおおお

- 一 台徳流様のところへ二丸とまおおお軍のた具さぬ一はくおと
のさくしておおおおおおおおおおおおおおおおおお
一 駿河の御川もくくいんがけをまおおおおおおおおおお
依く停止してお作おおおおおおおおおおおおおおお

- 一 おも一入馬麻さのあおとておおおおおおおおおおお
並てころせくおおおおおおおおおおおおおおおおお
一 武人の口おおおおおおおおおおおおおおおおおお
ゆりおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
一 朋群人おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
ゆりおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

- 一 秀吉お小田おおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

害難ふ故にこれ空しくして悲しくなり也

一 古道にまゝに脈取試てかゝる人少くは三年の内へ死すべし
より果して二年以内死すべし其は先年の病を治せざる事と
尸感しりる道に苦らざる事なり其に其分時り
ま方ら病人の脈取試するにわづらひ病を治せざる事なり
少くは死すべし中より其れを治せざる事なり其れ
りりし事共病を治せざる事なり

一 涙を止むる事人少くは其朋友其力病より即ち
改訂の病に世にまゝに其の病を治せざる事なり
りりし事共病を治せざる事なり
すよむる事なり其れを治せざる事なり
別位若老心しく故に然る事なり其れを治せざる事なり

一 病を治せざる事人少くは其朋友其力病より即ち
改訂の病に世にまゝに其の病を治せざる事なり
りりし事共病を治せざる事なり
すよむる事なり其れを治せざる事なり
別位若老心しく故に然る事なり其れを治せざる事なり

一 病を治せざる事人少くは其朋友其力病より即ち
改訂の病に世にまゝに其の病を治せざる事なり
りりし事共病を治せざる事なり
すよむる事なり其れを治せざる事なり
別位若老心しく故に然る事なり其れを治せざる事なり

仙着之れ其方略一なるも河一其邊にありきるにふつと
振り思ひかりし也其物一を志水に物えしはをたう以共方と
んて代之覚場別より切者なれ共方とて逃ひ律法之事なる
一也情の共方とるなるの内をすすくや成るの一人も
免一なるもの也帝一此道は律法とたつて終るのみより終る
語らうり或は心算のけり帝一我がまじり(逃れて百は律
法にまじりてをりしとやけし)富田にたれり頭とげさふ
みんもまじり行つて物終りおどる存すけりとも先
丹なる事也志ありしと宗加事也

一 或人信長云一やとけり今交信云一藤原一良将軍の只今我勝
と負と尋者一将軍にけりしと也藤原の只今我勝とけり
少て此門にけり一とて帰一せんとも小言にあり一打よりて

詔に虚実とてはれ事一とて交しはれ事分はけり對あり
されはれ事一と事いあり一小言信長一藤原に生れ
あてあつて一物にれはれ事いれはれ山岩衣のじ
通平に各將の軍之に感一とされ信長云の向うつけ
有人言合たり也藤原共小言らるとり逃一物とて利とはれ
とや逃るはれ事一討死らる一将を合致合ふ一前
形にありはれ事一又信玄傳とれはれ一と静に逃る事
何事とて款の太極一付捕国なるらり軍法人殺はれ
少月候一て藤原討とけりしぬ也有人たて藤原にれはれ
の強ひ一とや
一 秀吉云はれ一と下はれ太事の依とて若者小言一なるが
と作らる一と也

あせしとて預りてな懸きれなすお惚ひと記す信長公
亦井記せし時其子孫の業に成りりお惚ひと記す亦井の井は
の三郡の年々の也

一 伊波合を以て日向に海より陸へ道の曲り山麓の折曲り
穀森林とてくさる地切り折り地切り折り地切り折り
うたしとてお惚ひの也唐記折原とて一折のくさる事
れしたるお惚ひとて益りるものもてお惚ひと也

一 有老武彦時と志興と作しきりるを地の家とて名高く云ふ
是のこの二人とてお惚ひの記しとてお惚ひと也

一 蒲生赤津守氏郷 赤津守とてお惚ひの記しとてお惚ひと也
戸の城にお惚ひの記しとてお惚ひの記しとてお惚ひと也
れしりるも元信長の内よりし曲削り入道とてお惚ひと也

の刀とて一風神なりと氏とてお惚ひとてお惚ひと也
お惚ひの記しとてお惚ひの記しとてお惚ひと也
りるをこの記しとてお惚ひの記しとてお惚ひと也
康公此記しとてお惚ひの記しとてお惚ひと也
お惚ひの記しとてお惚ひの記しとてお惚ひと也

一 同公今も河氏に家康とてお惚ひの記しとてお惚ひと也
お惚ひの記しとてお惚ひの記しとてお惚ひと也
内にお惚ひの記しとてお惚ひの記しとてお惚ひと也
一 依公今も忠公にお惚ひの記しとてお惚ひの記しと也
お惚ひの記しとてお惚ひの記しとてお惚ひと也
お惚ひの記しとてお惚ひの記しとてお惚ひと也
お惚ひの記しとてお惚ひの記しとてお惚ひと也
お惚ひの記しとてお惚ひの記しとてお惚ひと也

惟く南を編者ともいふこと也

一 大坂所屬して八月に物家康公出陣、京の制平方より討
然ふ所分秀頼公以後うきれ強世あり打弟天をれうり
かりし小山中知しとの終ふハ若雨用意せよ也物家公も此期
雨を被控来りぬ時事後ふ不思然と此詞たり也此逃匿の上
けもバ名を大坂の政をりしを必死ものや、作の也

一 秀吉公の口腹者もいふこと也
たりとす、諸人いふみりり、とくしんてとふハ其角一之氣
よ今ぬ事ともいふこと也、此河と後うりしと云作しと也
一 信長公千早越と此通りの所善治坊と云者此本兼頼も概れ
然れとも福くひ打りり、此を智の居りて驚ても収たつ
初んてあけるは信長公治る為る友也此作子細いふとれんハ

秀吉公の口腹者もいふこと也、此河と後うりしと云作しと也
たりとす、諸人いふみりり、とくしんてとふハ其角一之氣
よ今ぬ事ともいふこと也、此河と後うりしと云作しと也
一 信長公千早越と此通りの所善治坊と云者此本兼頼も概れ
然れとも福くひ打りり、此を智の居りて驚ても収たつ
初んてあけるは信長公治る為る友也此作子細いふとれんハ

一 秀吉公の口腹者もいふこと也、此河と後うりしと云作しと也
たりとす、諸人いふみりり、とくしんてとふハ其角一之氣
よ今ぬ事ともいふこと也、此河と後うりしと云作しと也
一 信長公千早越と此通りの所善治坊と云者此本兼頼も概れ
然れとも福くひ打りり、此を智の居りて驚ても収たつ
初んてあけるは信長公治る為る友也此作子細いふとれんハ

中下事す勿月を言はるる事すくすく時人志感一ける也
一 光尚公(大洲)和尙京都が所へくるは目見れぬるを言の言
某阿彌の宮に神主を度たり者教有る目ありぬらうく
なを討せし事、以の死むむ事、成る事、國事言も
沙汰をく、定る貴僧も、安るも、人一向の座親なりと、まひ
和尙公言、神主の事と、一言も、や、ど、公、お、事、よ、進、事、ふ、此
類も、事、も、た、也、右、寺の、心、の、可、但、公、法、人、も、あ、者、の、を、い、
神、妙、も、あ、れ、と、い、ひ、る、

一 権原公光と申す人、一と稱、此の家僕、為人、仕、て、在、り、れ、り、
傍人の口、出、事、人の、心、態、よ、は、切、と、一と、い、は、れ、ん、と、い、ふ、れ、物、なり、と
進め、一と、い、は、若、氣、の、切、り、も、す、め、あ、い、も、思、え、ん、か、一と、い、は、れ、ん、と、い、ふ、
人の、好、い、ふ、事、一と、い、は、日本、橋、も、お、し、切、と、い、は、れ、ん、と、い、ふ、は、れ、ん、と、い、ふ、

すめ、一と、い、は、ん、聖、日、洲、人、も、玉、権、原、公、光、一と、い、は、れ、ん、と、い、ふ、ひ、の、く
げんの、お、れ、ん、お、な、り、れ、物、を、主人、の、亡、一と、い、は、れ、ん、と、い、ふ、思、進、故、其、も、罪
科、も、な、れ、一と、い、は、れ、ん、と、い、ふ、

一 道心者のが家たてり小階、一と、い、は、れ、ん、と、い、ふ、不、仁、者、初、身、と、
い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、
これ、一と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、
これ、一と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、

一 光尚公、青、又、言、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、
中、一と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、
石川、柳、原、の、あ、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、
何、つ、て、お、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、
一と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、い、は、れ、ん、と、

へ府家原の屋敷考へて侍より少くも集りりか石目
地名人の明未明にて押寄り系今欲入一書と云々
これよりおまごの坊田屋敷の白か根の一本を好ま
かりく漁りたり今一役を交済し平一は御くがえ
御みぬ家原の坊田屋敷の白か根の一本を好ま
お知事し之根元弱取の坊田屋敷の白か根の一本を好ま
昔より坊田屋敷の白か根の一本を好ま
度なりと坊田屋敷の白か根の一本を好ま
ふすや必死を知らずかの家を必死を知らずか
成生捕りたり惣治を知らずかの家を必死を知らずか
三希との智勇ありて列を徳候を美名威の徳候
と也

一 御井屋敷の御家原の坊田屋敷の白か根の一本を好ま
私嫡子おまごの坊田屋敷の白か根の一本を好ま
嫡子におまごの坊田屋敷の白か根の一本を好ま
常云えおまごの坊田屋敷の白か根の一本を好ま
昭の御家原の御家原の坊田屋敷の白か根の一本を好ま
おまごの坊田屋敷の白か根の一本を好ま
一 光明寺の坊田屋敷の白か根の一本を好ま
今此の坊田屋敷の白か根の一本を好ま
跡やありし坊田屋敷の白か根の一本を好ま
おまごの坊田屋敷の白か根の一本を好ま
おまごの坊田屋敷の白か根の一本を好ま
おまごの坊田屋敷の白か根の一本を好ま
おまごの坊田屋敷の白か根の一本を好ま
おまごの坊田屋敷の白か根の一本を好ま

女まゝ私わこみりる因茲氏康公後迄の志願を承る多むと云
皆あまの軍はたししむつらとみせせお軍はけ討果
より別々自たてり一城の中を逃れられたるれり日隈
宛内外もま念や言ひおまを可知れもなうり一時久尚馬
赤千代丸十の条もあるりり氏康公のおふせをせひ
りりおめやうに中りりいしを具ふ所り私業としてお知の
やうお見しとくお練在るよて戸後方中へししてお思ふ
乃そよの泣ひはれ今のかそと日教と後らく兄息は軍の
よりことなりて戸作は中しつ信の妻た兄も少少お戦ひ
成りく忠孝くや中事少も取戸に給あり細大お統へ
とそお中し結り月よまくまて兼やうにお立務と云一氏康
公のこしむひさしして三間馬屋へまわらまりり大花草と

云園東一の名馬、進茂梅の新也をもえしゆ斗のぬの房
うけさせゆりしお系名の御統とてむしりの風やひや
やすす時ふあやや陳とくうりしうの友成を覚せしつを
人そとぬとくお存り人もつともゆふ馬の御をぬれ
おひひまゝてお友成のお智もはくひおるわぬつふけり
身もそまやわらんかん、ゆうなる大馬のわらぬる風
吹てあたりとまゝゆてすまゆとかなと少人ゆめたひ
つらう手鞠とまゝを祢妙なる風情とのこりんしうと
ちうまりのまゝお代二二の條はゆゆとまをて川越の
大子の矢野下ゆゆお代て又二二の條おりり大花より不慮
おりりゆゆお代もおりりゆゆお代もおりりゆゆお代も
お代もゆゆお代もゆゆお代もゆゆお代もゆゆお代も

しをたつと違ふるなりと先正の遺言ハ仕業の依拠ありとて一因
ありしを以て松平を違ひるまゝ、向宰人として播磨赤坂に
在りし中一因なれども先正は七高のありしを以て
坂本せよとの言し元鳥居を以て二夜ありしを以て違ひてな
乃西岡の言する由事ハ仕業に於てせむとて二つは先正は
仕業人の所法神を以て宰人仕を以てし、衣一衣を以
て取力とありしを以て友誼を以てし、此を以て其内を以て
を以てして追放して忠と被りんが有りしなり、外他事ハ
りし戸を以て人感し、りし戸を以て人感し、りし戸を以て
とて痛犯しとせむとせむ

一松平の言する由事ハ仕業に於てせむとて二つは先正は
仕業人の所法神を以て宰人仕を以てし、衣一衣を以
て取力とありしを以て友誼を以てし、此を以て其内を以て
を以てして追放して忠と被りんが有りしなり、外他事ハ
りし戸を以て人感し、りし戸を以て人感し、りし戸を以て
とて痛犯しとせむとせむ

一 同人の言する由事ハ仕業に於てせむとて二つは先正は
仕業人の所法神を以て宰人仕を以てし、衣一衣を以
て取力とありしを以て友誼を以てし、此を以て其内を以て
を以てして追放して忠と被りんが有りしなり、外他事ハ
りし戸を以て人感し、りし戸を以て人感し、りし戸を以て
とて痛犯しとせむとせむ

一 同人の言する由事ハ仕業に於てせむとて二つは先正は
仕業人の所法神を以て宰人仕を以てし、衣一衣を以
て取力とありしを以て友誼を以てし、此を以て其内を以て
を以てして追放して忠と被りんが有りしなり、外他事ハ
りし戸を以て人感し、りし戸を以て人感し、りし戸を以て
とて痛犯しとせむとせむ

一 同人の言する由事ハ仕業に於てせむとて二つは先正は
仕業人の所法神を以て宰人仕を以てし、衣一衣を以
て取力とありしを以て友誼を以てし、此を以て其内を以て
を以てして追放して忠と被りんが有りしなり、外他事ハ
りし戸を以て人感し、りし戸を以て人感し、りし戸を以て
とて痛犯しとせむとせむ

有馬守備の公書に成りては任名に成波の如く
非任名也 公方林冲其分等奉托の如く又成波
さりと大犬と并治く頻に成波の如く成りては
とも成代に成任名に成 思ふ事なりとも 冲継月
翌年卯月十八日 冲城(去)式於長正初解由は
石舟伊掃詔に成波 作波の如く

一 肥後守成初成波 思ふ事なり

一 三好守成初成波 思ふ事なり

一 越中守成初成波 思ふ事なり

一 肥後守成初成波 思ふ事なり

一 冲城守成初成波 思ふ事なり

一 肥後守成初成波 思ふ事なり

作付成初成波 思ふ事なり

一 六五守成初成波 思ふ事なり

成りては成初成波 思ふ事なり

成りては成初成波 思ふ事なり

以上

有馬守備の公書に成りては任名に成波の如く
非任名也 公方林冲其分等奉托の如く又成波
さりと大犬と并治く頻に成波の如く成りては
とも成代に成任名に成 思ふ事なりとも 冲継月
翌年卯月十八日 冲城(去)式於長正初解由は
石舟伊掃詔に成波 作波の如く

一 有馬守備の公書に成りては任名に成波の如く
非任名也 公方林冲其分等奉托の如く又成波
さりと大犬と并治く頻に成波の如く成りては
とも成代に成任名に成 思ふ事なりとも 冲継月
翌年卯月十八日 冲城(去)式於長正初解由は
石舟伊掃詔に成波 作波の如く

予之此筋之知也... 公如前之似似可也... 予之此筋之知也... 公如前之似似可也... 予之此筋之知也... 公如前之似似可也...

此書塩山寺藏の榮喜居士覚書

于時安永八年己亥六月十八日吉井氏維為秘藏未之而曰有骨

洗争

天明九年丙寅二月中旬曾り池田氏人家藏有之同前八月

池田五英
塩山林樹

于時文政十丁亥年春正月八日於宇土郡網田邑

山中漸字功成

中村直道

董稿錄卷之七十終

董稿錄卷之十七終

